

笑いの追求

—留学生向けの落語会における笑いを含む相互行為について—

ブッシュネル ケード

要 旨

本研究では会話分析を用い、留学生向けの落語会において、観客がいつ、どのように笑うかを検討する。特に本研究のデータにおいては、次のことが観察できる。「ボケ+ツッコミ」という探索の枠組みが観客に与えられる。観客は、それを参照しながら落語家の発話を聞くことによって、「笑う位置」を検出することができる。そして、もし笑う位置に適切な笑いが提出されれば、参加者たちは現行の行為連鎖を直ちに終了へともたすことができるが、そうではない場合、落語家は、笑いをさらに追求することによって、連鎖を拡張することができる。その場合、説明を付加することが多く、適切な笑いの欠如を「理解の問題」として扱う。Sacks (1989) のアメリカ英語における冗談に関する研究と比較し、笑うという行為が、笑える要素を「理解した」との主張と、どのように関わるかを検討していく。

【キーワード】 落語 笑い ボケ ツッコミ 会話分析

In the Pursuit of Laughter : laughter-in-interaction at a *rakugo* performance for foreign students

BUSHNELL Cade

[Abstract] The present study uses conversation analysis to examine when and how audience laughter occurs in a *rakugo* performance for foreign students. In the case of my data, the pattern of *boke+tsukkomi* (“goofiness + straight response”) is given and used as a search frame for the audience to discover laughter-relevant spots within the *rakugo* performer’s talk. The analysis shows that when appropriate laughter is submitted in a laughter-relevant spot, the participants can smoothly move to sequence closure. However, when no such laughter is submitted, the *rakugo* performer can pursue laughter, thereby expanding the sequence. In such cases, it was found that the performer often offered explanations. In this way, the absence of appropriate laughter may be treated by the participants as a problem of understanding. Drawing upon Sacks’ (1989) analysis of the organization of a joke’s telling in American English, I consider the relationship between doing laughing and claiming an understanding of the laughable item.

[Keywords] *rakugo*, laughter, *boke*, *tsukkomi*, conversation analysis

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは、2001年度から本稿執筆現在に至るまで、酒井たか子先生(人文社会系教授)がプロの落語家を呼んで18回の留学生向けの落語会を実施している。その目的とは、落語という日本独自の話芸を通して、日本語の面白さを、日本語を勉強している留学生に味わわせることによってその学習意欲を高めるとともに、落語を視聴すること自体によって日本の伝統文化をより深く理解し、日本語のスピーチスタイル、終助詞、呼称などを意識化させることである。また酒井(2012)によると、日本語の授業におけるロールプレイなどでは男女や年齢が不自然になる場面でも落語の手法を取り入れれば、どのような登場人物でも無理なく演じることができるということで、従来のロールプレイなどと並べて、落語形式の活動には日本語教育の有効な手法の一つとしての可能性がある。

本研究では、会話分析を用い、2011年度に行われた留学生向けの落語会(第15回目)における落語家・観客間のやり取りを見る。その中で、とりわけ観客の笑いがどのような位置で起こり、落語家と観客の両方を含めた参加者によってどのように組織化されるかを綿密に記述する。また、笑うという行為が、笑える要素を「理解した」との主張とどのように関わるかも検討する。なお、周知のとおり、第2言語学習研究において、「理解する」ということは「言語を学ぶ」ということと不可分の関係にあり、その必須条件の一つだと考えられている(Krashen, 1981, 1985; Schmidt, 1990など参照)。

「笑う」という行為に関連する先行研究を見ると、まず日常会話などにおける笑いの社会的組織化を見たジェファソンらによる研究が挙げられる(Jefferson, Sacks, & Schegloff, 1977, 1987; Jefferson, 1979, 1984)。この研究は、日常会話において「笑い」が無作為に産出されるのではなく、発話そのものと同様に参加者の協同作業によって組織化されることを示している。この他、冗談やユーモラスな話に対する笑いに関する研究に、Sacks(1989, 1992)やNorrick(2010)などがある。Sacks(1989)の分析によると、冗談に対する笑いは局所的な発話文脈に非常に敏感であり、先行発話と密接な関係にあるとされる。また、冗談の後の笑いの一つの重要な機能として、冗談に対する理解および評価を示すことがあるとし、そのために笑いをできるだけ早い段階で産出する必要があると論じている。ただしNorrick(2010)は、フェースを保つために、笑いを早すぎる段階で産出しないようにする必要もあるとしている。Sacks(1989)やNorrick(2010)の研究から、相互行為において笑うタイミングを緻密に組織化することは、参加者にとっては眇たることではないと言える。

一方、漫談におけるパフォーマーと聴衆によるやり取りを見る研究(例えば、Furukawa, 2011; Wells & Bull, 2007; 岡本, 2009など)はあるものの、パフォーマンスにおける笑いの社会的組織化を綿密に分析した研究は、管見の限り、ないようである。また、近年、第2言語話者が参与する場合の相互行為を見る研究(Gardner & Wagner, 2004; Nguyen &

Kasper, 2009などを参照)は増えている。しかし、上記のJeffersonらの研究(Jefferson, Sacks, & Schegloff, 1977, 1987; Jefferson, 1979, 1984)などによって示唆されるように、相互行為能力の面から見て、適切に笑うということが重要な能力の一つであるにもかかわらず、第2言語話者による笑いの産出・組織化に関する研究は現時点ではほとんどないようである。そこで、本研究では外国人留学生向けの落語会における観客による笑いの組織化を見る。そうすることによって、①落語会などのように参与形式に制限がある相互行為(つまり、観客が「笑い」などのような反応を産出する以外の方法で参与することが不適切と扱われ得る相互行為; 岡本, 2009参照)に参加する場合、第2言語話者が笑いというリソースを用いてどのようにその参加を達成するか、そして②噺を以前に聞いたことがない第2言語話者が、笑うことによってどのような認識的態度(epistemic stance)を示すかを明確にできると思われる。

以下では、まず、データや方法、研究課題を示してから、外国人を観客として行われる噺(「子ほめ」)で、落語家から観客にどのような枠組みが与えられるかを検討する。また、与えられた枠組みを用いながら、観客と落語家がどのように協同で笑う機会を構成し、笑うという行為を相互行為的に組織化するかを記述する。最後に、早めにかつ最初に笑うことによって、観客がどのような理解を主張し得るかを検討していくことにする。

2. データと参加者、方法、および研究課題

2.1 データと参加者

本研究のデータとしたのは、2011年11月に筑波大学で行われた留学生向け落語会である。大学会館にある15畳の和室で2日にわたって行われた。落語家は上方落語の専門家であり、データ収集の時点で20年以上の落語歴を持っていた。観客には、外国人留学生(13名)の他に、研究者、および日本教育の専門家(5名)もいた。

2日にわたる落語会において、およそ4時間の録音・録画データを得ることができた。録音はICレコーダにピンマイクを付け、落語家と、無作為に選んだ観客3人に、それぞれ1台ずつ持ってもらった。こうすることで、観客の笑いとこれを含む落語家との相互行為を綿密に分析することが可能になった。録画にさいしては、部屋の前方と後方で固定のビデオカメラを1台ずつ置き、さらにもう1台を後方で、必要に応じてその向きなどを変えた。

2.2 方法

会話分析では、例えば「談話分析」(discourse analysis)などとは異なり、言語的様相のみならず、言語使用に併発する仕草や視線、身体動作などを含める「相互行為」を明るみに出すことが可能となる(Wooffitt, 2005)。本研究では落語会における落語家と観客間に

よるやり取りを見るが、その際、参加者の発話に加え、同一空間に居合わせている参加者がどのようにしてそのやり取りを相互的に組織化するかを綿密に見る必要がある。そのための分析の手法としては、会話分析が最適である。

分析の進め方に関しては、まず、録音・録画データを参照しながら、参加者の発話・身体動作を、会話分析の慣例（Jefferson, 2004参照）にしたがってトランスクリプト（文字化資料）を作成した。そして、録音・録画データを何度も無心に観察しながら、仮説をあらかじめ持つことなしにエスノメソドロジ的な観点（Garfinkel, 1967; Heritage, 1984も参照）で、気になる現象を特定していった。そして、それぞれの現象が含まれる行為連鎖を特定し、それぞれの連鎖の構造や、その構築に使われていた手続き、参加者が刻一刻公然化していた志向性などを記述しながら、事例間に共通点・相違点などがあるか比較していった（Hutchby & Wooffitt, 2008など参照）。

2.3 研究課題

本研究の主な目的は、落語会における笑いの組織化を綿密に記述することである。そこで、以下の論点について、分析を通して考察していきたい：

1. 笑う位置は、どのように可視化されるか
2. 笑う位置で笑うことは、どのように達成されるか
3. 笑う位置が来ても適切な笑いが提出されない場合、どのような対処がなされるか
4. 笑う位置より早い段階で笑いを産出することで、何を達成するか

3. 笑いの組織化

3.1 「ボケ」と「ツッコミ」——「笑う位置」の探索枠組み

噺そのものを実際に開始する前に、落語家は通常「枕」と呼ばれる前置きの話をする。この枕では、観客の興味や関心を高めたり、本番の噺を視聴するための予備知識を観客に与えたりするなど、本番の噺に向けてウォーミングアップを行う（林家, 2012）。本研究のデータの場合、枕ではまず漫才における「ボケ」と「ツッコミ」に言及し（漫才におけるボケとツッコミの会話分析についてはTsumumi, 2011参照）、その概念について以下の断片1のように説明している。そしてその後、大阪の観客の特徴としてボケの後ではなく、ツッコミの後に笑うということを取りあげ、それから本題の噺が「ボケ」と「ツッコミ」によって形成されているということを告げる（Rは落語家；トランスクリプトの記号に関しては、付録を参照）。

1 ボケとツッコミ A(3)4:59 V21:27

1. R: ボケっていうのは, (0.2) うん, あ- 馬鹿なことを言う, >これがボケ<
2. ですね, .h それについて>何を馬鹿なこと言ってるんだ.< (0.2)
3. と言うのがツッコミというんですけれども, .hhh
 ((中略:約27秒→ 東京ではボケの後に笑うということを説明))
4. R: ところが大阪はどこで笑うんかといったらこのおもしろいことを言った
5. ときに笑わない. .hh このあとにつっ:こんだときに笑[うんです。
6. Ps: [[静かに笑ったり、
頷いたりする]]
7. R: このボケとツッコミでできあがってるというお話をまず聞いてもらいたい
8. と思います。

以下の分析で特に焦点を当てたいのは、1～3行目である。1行目では、落語家が「ボケ」を主題化し、0.2秒の間合いの後、それが「馬鹿なことを言う」と説明している。それに対して、2行目では、「>何を馬鹿なこと言ってるんだ.<」と言うのが「ツッコミ」であると説明される。ここで注目すべきことは、落語家はその説明の中でツッコミの例を実際に演じてみせているという点である。つまり、「ツッコミはボケの馬鹿な言動をとがめる」などと言葉のみで説明せずに、ツッコム人のセリフをその人が実際に言うであろうと思われるような口調で発して聞かせている。また、この発話の産出の仕方を見ると、「何を馬鹿なこと言ってるんだ」の部分(2行目)は周りの発話より早いペースで産出され、音量も大きくなっており、多少荒っぽく聞こえる調子になっている。このように、産出の特徴で「ボケ」と「ツッコミ」の区別を観客に認識しやすい形で発話を組織化していることが分かる。

そして、断片1の動画を見ると、1～2行目の発話に伴う身体的表現によっても「ボケ」と「ツッコミ」を区別し、「ツッコミ」をする時の身体的動作の特徴を観客に実際に示しているということが分かる。



図1 馬鹿なことを言う,>これがボケ<ですね, 図2 >何を馬鹿なこと言ってるんだ.<

まず、「ボケ」の説明をしながら、観客に身体と視線を向けて話し、「>これがボケ<です、ね、」を産出するとともに、それまで徐々に下降させていた両手を止めて、何かを自分の前におくかのような動作をする(図1)。これに対して、「ツッコミ」の説明に際しては、「>何を馬鹿なこと言ってるんだ.<」と発しながら、身体と視線を(観客から見て)左に向け、右手で何かを突き返すように動かす(図2)。つまり、身体的表現と発話の組み合わせが用いられる。最初に「ボケ」を自分の前に置くものに見立てておいたうえで、ツッコミの説明を行う時には、身体や視線をその直前と異なる向きに切り替え、右手で突き返すような動作を行うということを通して、「ボケに突っ込む」という概念を具体化する。そして、大阪では「ボケ」ではなく「ツッコミ」のあとに笑うということと、次にする噺というのは「ボケ」と「ツッコミ」で構成されているということを告げてから、本題の噺を開始する。

このように、落語家が観客に「ボケ」と「ツッコミ」が聞き分けられるための説明を与えるとともに、「ツッコミ」を言語的・非言語的な資源を用いて実演的に示したあとに、次に聞かせる本題の噺がこの「ボケ」と「ツッコミ」で構成されているということを予告することによって、観客に、刻一刻繰り広げられる噺の中で、笑ってしかるべき(つまり、笑うという行為を産出することが妥当である)話の展開における節目を見出すための探索枠組みを与えている。本研究では、このような節目を「笑う位置」と呼ぶことにする。

Sacks (1989) はアメリカ英語による会話を検討し、会話に埋め込まれた「冗談」と、それに対する「笑い」の組織化を記述している。Sacksによると、会話に埋め込まれた冗談は前置きを伴うことが多い。前置きには、典型的には、語られる内容の情報源や新しさ、さらに要点などが組み込まれる(Sacks, 1989: 340)。これを手がかりに、冗談の受け手は、冗談を聞きながらその「オチ」を探知し、「オチ」を捉えたときに、ただちに笑いを産出することが可能になる。具体例を挙げるなら、冗談の語り手が「昨日妹からちょっと下品な冗談を聞いたけど」と言うと、冗談の受け手には「下品な要素を探す」という探索枠組みが与えられる。そして、その枠組みのもとで、語られる話を聞くことにより、下品な要素が出現すると、冗談の「オチ」、および笑う位置を特定することができる。換言すれば、下品な要素の出現こそ、笑う位置の到来にほかならないからである。そして、このような考え方を、先に記述した「ボケ」と「ツッコミ」の説明の場合にまで押し広げることができるだろう。つまり、この説明は、Sacksの冗談の前置きと機能的に類似している。なぜなら、「ボケ」と「ツッコミ」という要素が噺の中から認められれば、噺の一つの節目の到来、したがって笑う位置を観客は知ることができるからである。つまり、このような探索の枠組みにしたがえば、噺の中から「ツッコミ」が認められると、その前後に「笑う」という行為が産出可能な場所が構造的に備えられることになる。そして、その位置にこそ「笑う」という行為の産出が妥当・適切であることも理解可能になる。さて、(噺家を含め

る) 参加者がこのような探索枠組みにどのような志向性を示すか、次節でみていきたい。

3.2 笑う位置で笑う

以下の断片2では、落語家は、「子ほめ」という噺で、主人公の喜六と甚兵衛という2人の人物を演じ分けている。断片の直前で語られているのは、ただで酒が飲めると聞き間違えてしまった喜六が、甚兵衛のところに駆けつけて来るということである。断片では、甚兵衛が「ただの酒」ではなく、灘の造り酒屋の親戚から毎年送られてくる「灘の酒」なのだと言及する。なお、落語では、落語家(R)が複数の人物を演じ分ける。今回の研究で分析した場面には二人の人物が登場するが、そのトランスクリプトでは、主人公をR₁で示し、もう一人の登場人物をR₂で示す。つまり、パフォーマンスではすべての登場人物が同一人物である落語家によって演じられるが、落語のストーリーの中ではそれぞれ異なる人物であるという設定になっているため、そのことを分かりやすくする目的で、トランスクリプト上でもR₁とR₂という記号の利用によってそれぞれの登場人物を区別する。観客に関しては、特定可能な個人の場合にはアルファベット一文字で示し、不特定多数の観客の場合、Psで示す。トランスクリプトの他の記号に関しては、付録1を参照されたい。

2 けちんぼ A(5)8:04 V24:40 S05 8:20

1. R₁: そやけどあんた, .hhな::だと (0.2) た::だやったら .h
2. ひらがなで書いたらちょっとの違いやで .h 1杯ぐらい
3. おごりいな:. .hh けちんぼ.=
4. R₂: =n >#誰がけちん[ぼや.#<
5. Ps: [HAH HAH HAH HEH heh heh °heh heh heh°

1～3行目では、酒を結局ただで飲めないことを知らされた喜六が、「灘」と「ただ」の音的に類似していることから、それを聞き間違えるということについて責任を問われるべきではないこと、そして「灘」を「ただ」と間違えるということは酒の供与を断る理由として成り立たないということを主張する。また、ここまでただで酒を与えようとしなかった甚兵衛を、「けちんぼ」と呼ぶことによって否定的に評価する(3行目)。そして、「けちんぼ」の産出後にすかさず発話を続けて、4行目で甚兵衛は、3行目の「けちんぼ」に密着する形(トランスクリプトではこれを「=」で示している)で「n #誰がけちんぼや#」を産出する。すると、5行目で複数の参加者が大きく笑い出す。5行目における笑いの産出の時点は、4行目で甚兵衛が①「誰がけちん」まで産出し、3行目の喜六による「けちんぼ」の指示対象を問題化する発話として認識可能になった時点であり、かつ②その話す調子や速さを著しく変化させながら、急に右に振り向くという動作がなされた直後である。

落語家は具体的に笑う位置をどのように出現させ可視化しているのか。そして、それが噺の開始前の「ボケ」と「ツッコミ」に関する説明とどのように関連しているのだろうか。以下では、同時多発的な笑いを呼び起こした落語家の振る舞いを、より綿密に記述していく。

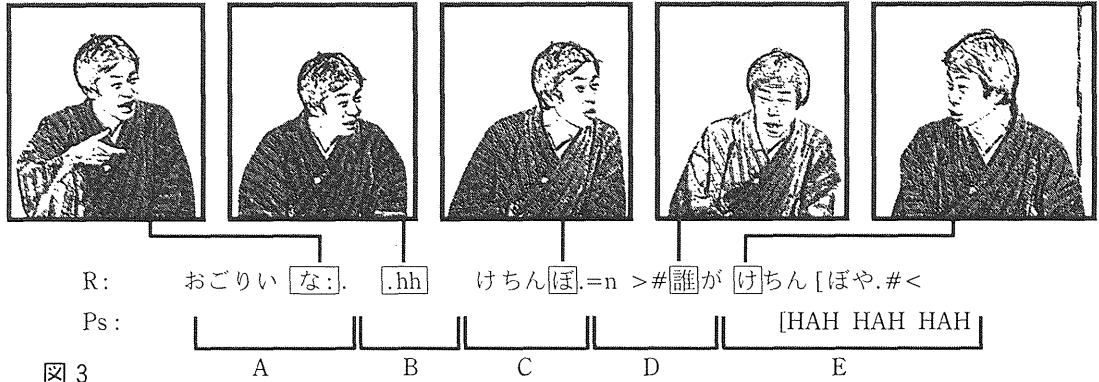


図 3

3行目では、喜六の「おごりいな:」という台詞を発話する。これに伴って、落語家が右手で杯を持っているような手振りを見せる。そして、これを、「な:」の部分が発しながら下し始める(図3A)。次に「.hh」と息を吸うとき、口を閉じずに半開きにしたまま、上半身を右へと乗り出し始める(図3B)。このような身体動作によって、これからも発話をし続けることが観察可能になる。そして、右手を完全に膝まで下ろし終わると同時に、上半身をさらに右の方へ移動させ、「けちんぼ」を産出する(図3C)。「けちんぼ」の「ぼ」を発するなり、首と身体の向きを大きく変えながら「n 誰が」を産出し、向きの変化が終了するとともに「けちんぼや」を産出する(図3D、E)。

この発話(「誰が・・・」)は直前までの発話と異なって、喜六ではなく、甚兵衛の台詞として産出されるものである。落語では、2人以上の人物を演じ分ける際、その入れ替わりがわかるよう、視線や首の向きを変えることがある。そして、噺の前に、落語家が実際にそのように観客に説明しており、実際、断片2が始まる前にも、噺の中でこのような手法で、役の入れ替わりをすでに数回演じている。断片2の第4行目でも、向きを第3行目のそれと異なる方向に変化させることで、喜六と甚兵衛の役の入れ替わりを行なっている。

しかしその一方で、今回の役の入れ替わりは、向きの変化を非常に素早く行う³点で、それ以前に数回行ってきたものと区別される。そうすることで、役の入れ替わり以上の行為を組み立てている。つまり、そこで素早く振り向くとともに、発話産出の速さも著しく上げ、険しい顔の表情と荒っぽい声の調子で発話を産出することによって、第4行目を、

3行目の喜六の「けちんぼ」に対する甚兵衛の「怒りの反応」として可視化している。換言すると、4行目で観察される一連の行為は、喜六の3行目の発話に対抗するものとして組み立てられているのである。そしてその行為の軌道が可視化され、また「けちん」の産出とともに3行目の「けちんぼ」が問題化されつつあることが理解可能になった時点で、観客からの笑いが巻き起こっている(図3E)。

断片1で見た落語家による「ボケ」と「ツッコミ」の説明と照らし合わせることで、断片2の1～3行目における喜六の言動を「ボケ」として、また4行目の甚兵衛の言動を、喜六の「ボケ」を突き返す「ツッコミ」として捉えられることが可能である。つまり、噺の前に落語家によって与えられた探索の枠組みを用いることで、観客は、「笑う位置」を断片2の第3行目と第4行目において、検出できる。そして観客が、落語家がリアルタイムに織りなす行為の流れを参照し、その中から笑う位置の探索に成功したということ、5行目の同時多発的な笑いによって示している。

以上の分析で明らかになったように、落語家は、先行発話を問題化するなどのような言語的行為のみならず、発話産出の調子や速さを調節することや、顔の表情や体の向きを急に変わるなどのような非言語的行為を総合的に組み立てることなどによって、「ツッコミ」が行なわれることを明らかにし、その結果「笑う位置」を可視化している。本研究のデータには断片2に似通った例がいくつも存在するが、紙幅の関係でここでは取りあげられない。

断片2のような例を見ると、落語家が「ボケ+ツッコミ」を組み立て、観客に「笑う位置」を知らせていることが分かる。そしてこのような合図を受けて、観客はツッコミの軌道が可視化される瞬間に大きく笑う。このように観客は、刻一刻産出される落語家のトークを聞きながら、自分たちの行為を産出しているということも明らかである。ただし、次の疑問点が残る。落語家が笑い産出の作業にどのように貢献するか、そして笑いの産出後に、参加者がどのように連鎖を終了させ、インタラクションを進行させるであろうか。

以下の断片は断片2の続きである。

3 けちんぼ(続き)

4. R₂: =n #誰がけちん[ぼや.#

5. Ps: [HAH HAH HAH [HEH heh [heh °heh heh heh °

6. →R₂: [あ: ? [そらまわしと

7. → お前の仲やからな、お酒の1杯ぐらゐは飲ましてやらんことは

8. → ないけれどもやな:

矢印を付された行は、いずれも観客による笑いが起きた直後の落語家によるものである。断片3を見ると、6行目で落語家が5行目の観客の笑いと同重ならせながら発話をしているこ

とが分かる。そして、重なりの在り方を見ると、観客が笑いを産出していることが十分確認可能な時点で、その発話は始まっている。そして、落語家は実質的な語彙項目からではなく、「あ」などのような「順番導入の措置 (turn-entry device ; Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974 : 719)」から発話を開始している。こうすることによって、観客の笑いを遮ることなくそのターンスペースに入り、連鎖終了を開始する。そして、落語家による終了開始の直後に、観客はその笑いの音量を著しく落とし、最終的に笑い止むと同時に、落語家が実質的な発話を産出する。このようにして、落語家は、観客の反応 (=笑い) を問題化することなく、むしろ、実際に終了を開始することでそれが連鎖を終了させるのに十分な反応として扱っている。そして、落語家・観客が互いの行為を相互に参照しながら、連鎖終了を達成すると同時に次の連鎖への進んでいく。断片3の続きも同様である。13行目で観客から笑い声は何回か確認できた時点で、落語家が観客の笑いと同様な形で順番導入の措置で発話を開始し、落語家・観客による連鎖終了が交渉されると同時に次の連鎖へと進む。

最後にもう一つの例を確認しておこう。以下の断片4は多少変則的なケースである。この断片のまえまでは、色々な褒め方を甚兵衛に教わった喜六が町に出て、褒めることでお酒を奢ってもらえる人を探し回るという話がなされていた。断片では面識のない相手 (R₁) に声を掛けてしまって失敗する。そこで、相手に「突っ込まれる」とすぐ逃げて行くため、その後は2人の人物によるやり取りとしてではなく、喜六の独話として演じられる場面である。

4 なれなれしい A3 15:39 V15:56

10. R₁: あ さようか:eheh .h わたいもあんだのこと
 11. 知りまへんね:n. .hhさいなら=
 12. R₂: =>#あ な:nや:あれ[は.#<
 13. Ps: [HAH HAH HAH [HEH heh heh heh
 14. →R₁: [あ hh hhh あかん。え::?
 15. → .hh やあ::もしじゅうごろく やいうても知ら:n人に声
 16. → かけたらあかんわな:知ってる人, 知ってる人.

上記断片3で確認してきたやり取りと同様に、13行目で観客から大きな笑い声は何回か確認できた時点で、落語家が観客の笑いと同様な形で発話を開始し、次の連鎖へと進んでいる。いずれの場合も、落語家が発話を始めると、観客はその笑い声を次第に小さくし、発話権を落語家に譲渡している。そうすることによって、「ボケ+ツッコミ」で開始された行為連鎖を大きな笑いで終了にもたらず。すなわち、連鎖の終了は、落語家と観客の協同作業により達成されている。

これに対して、観客からの反応が連鎖を終了させるにの不十分なものとして、落語家によって扱われる場合もある。その例を次節で見ていきたい。

4. 笑いを追求する

前節では、「(落語家による)ボケ+ツッコミ→(観客による)爆笑」というやり取りのパターンを記述した。そして、「ボケ+ツッコミ」というのは「笑う位置」を可視化することも示した。本節では、「ボケ+ツッコミ」によって可視化された「笑う位置」に「同時多発的な大きな笑い」がすぐ提出されない例をいくつか見て行きたい。「ボケ+ツッコミ」という行為が隣接ペア (adjacency pair; Schegloff, 1968などを参照) に類似した行為連鎖を開始する要素であり、その連鎖は、「同時多発的な大きな笑い」の産出によって終了されるのが妥当と参加者に志向されている。その笑いが来なければ、それは、欠如しているものとして追求され得る。

断片5は、喜六が甚兵衛のところでは褒め方を教わっている時のやり取りである。それは、様々の年齢の人の褒め方を教わった後、子どもの場合にどうすればいいかと聞くところから始まる。

5 五つ六つにしか見えへん(簡略版) A12:56 A3 13:01 V29:22

1. R₁: .hh ほなとおぐらいやったらとお::? .heh とはお若こう見える,
2. .hどう見ても いつつ むつつ とこないなりまんの?
3. R₂: #あほ↑↑かい(h)なおえ:.#
4. Ps: [hah hah heh [heh
5. R₂: [大体お前
6. 10歳ぐらいの子供をほめてやで: .h↑おっちゃん嬉しいこと言うて
7. くれるなh<. お酒おごりまひょうか↓って
8. #おごって[くれるかお前:.#
9. Ps: [HAH HAH [HAH HAH heh heh [heh
10. R₁: [いや. [子供はおごって
11. くれまへんけどね:, 横手についでる親が喜んで飲ましてくれますやろ?

1～2行目では喜六が、10才ぐらいの子供を褒める場合でも、前に教わった褒め方を踏まえ、実年齢より数年若く見えると言えればいいかと聞いている。このような推論を甚兵衛が3行目の「#あほ↑↑かい(h)なおえ:.#」と答めるとき、上の断片で見てきたような「ボケ+ツッコミ」が観察可能となる。ところが、4行目の笑いというのは、数人の観客による音量の小さな笑いである。ここでの笑いの音量は、上の断片3第5行目および断片4第13行目、または断片5第9行目と対比して、著しく小さい。落語家自身に付けてい

たレコーダで収集した音声データの波形を見ると、それぞれの音量間に下図4A~Dで示すような違いが確認できる。

繰り返しになるが、上記断片3および断片4の続きでは、落語家による「ボケ+ツッコミ」のあとに観客が同時多発的に大きな笑いを提出すると、連鎖の終了が適切となり、落語家と観客の協同作業によって連鎖が終了した。しかし断片5の5~8行目では、落語家(甚兵衛)は、新たな連鎖に進んで行こうとせずに、3行目でなぜ喜六が「あほう」と評価され得るかを、さらに説明する。すなわち、「ツッコミ」を拡張している。すると、9行目で観客が大きな笑い(下図4b参照)を産出する。そして、その大きな笑いが十分確認可能な時点で、上記断片3および断片4と同様に、落語家は、観客の笑いと同重ならせながら新たな発話を開始し、次の連鎖へと進み始める(10行目)。観客のほうも、落語家のこのような進行性に志向した行為を受け、笑いを小さくしてから止める。

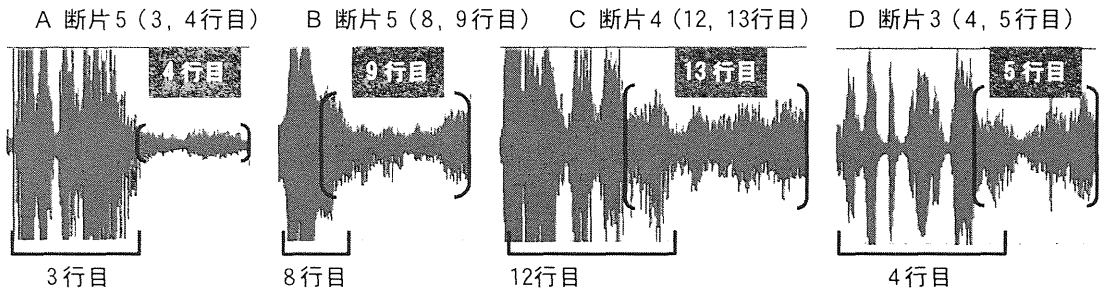


図4 笑い間の音量比較

以上の分析から明らかなように、落語家の「ボケ+ツッコミ」によって生起する「笑う位置」において、観客による「大きな笑い」が提出されなければ、それが欠如しているものとみなされ、落語家は現行連鎖を閉じずに、説明を付加したり、「ツッコミ」をやり直したりすることによって、観客の笑いを追求する場合がある。無論、このような条件下で、笑いの追求が必ず観察されるというわけではない。しかし、「ボケ+ツッコミ」の後に「大きな笑い」と扱えるような反応がない場合、そのような笑いを、欠如しているものとして追求することが理解可能な行為として成立するのは、「(落語家による)ボケ+ツッコミ→(観客による)大きな笑い」という規範的パターンの存在への当事者の志向のゆえにほかならない。

もう一つの例を確認しておこう。以下の断片6は多少変則的なケースである。この断片では、喜六が断片4における相手をまた見かけて、別の人だと思ひ込み、再び声を掛けてしまう。そして、相手に「突っ込まれる」とすぐ逃げて行くため、上の例で見られたように相手による説明、あるいはさらなる「ツッコミ」などで観客の笑いを追求することが不

可能になる。そこで、上の分析で記述した「ツッコミ」を組み立てる時に使われたような手続きを用い、喜六本人が自ら取ってしまった理不尽な行動をさらに問題化したり、説明したりする。

6 今の奴や A16:18 V32:37

1. R₁: 向こうから来るやつあいつは見たことある.=どっかで見たことあるで.
2. =ちょっとあいつに声かけたろう¥かな:¥
3. eheh .heh こんにちは: !ご機嫌さんでございます!
4. ながいことお見かけしませなんだな:
5. (0.9)
6. R₂: なんやな.=ちょいちょいと:.
7. (0.3)
8. R₁: ちょいちょい? (0.2) .h あんたどっかで会いましたな:.
9. (0.4)
10. R₂: >#今ここでおうたがな:#<=
11. R₁: =>#あ今のやつやこれ(h).#< [h.hhhh
12. Ps: [((笑顔、もしくは静かに笑う))
13. R₁: >#あ[:か:んわこれ.#<=
14. Ps: [((笑顔、もしくは静かに笑う))
15. R₁: =[¥へ:: >慌てておんなじやつに [聞いてんねやこれなh.<¥
16. Ps: [heh heh heh heh [HAH HAH HAH HAH
17. HAH [HAH hah hah hah
18. R₁: [あ:::しじゅう ご ろく のやつ。あ:: ^ 向こうから
19. 来るのは伊勢屋の番頭さんやで: あの人は知らんとは言わさんな.

1～3行目では、喜六が道で「見たことある」人に声を掛けて、挨拶する。そして、しばらく会っていないと言い、相手の同意を、「な:」を付加することで求める(4行目)。しかし、相手はすぐ反応しないため、5行目で0.9秒の沈黙が発生する。沈黙の間、落語家が無表情な顔で宙を見つめることで、「反応をしない」という行為を観察可能にする。そして6行目でやっと反応をするが?、それは喜六の要求していた同意を示すものではない。むしろ、「なんやな」をまず発することで、喜六の先行行為には何らかの問題があると主張する。続いて、間髪を入れずに「ちょいちょいと:」を付加することによって、その問題が頻度に関わるということを明らかにする。また、同時に、6行目の発話は喜六からその行為に対する説明を求める行為を組み立てる。

すると、7行目の沈黙が発生させることで、喜六は要求された説明を提出することに対

して何らかの問題たある可能性があるということを示す。8行目で、「ちょいちょい？」を産出することで、その問題が理解に関する問題であるということを示す。0.2秒の間に相手からの反応が来ないということが十分確認可能になった段階で、4行目で発した「長いことお見かけしていない」という発話を「どこかで会った」に置き換え、再び「な:」を付加することで相手に同意を求める。そこで、9行目でまた相手が発話しないことで間合いが生じるが、5行目の沈黙と異なり、ここでは落語家が険しい表情で喜六の目を見つめるかのように視線をまっすぐに向け、発話をし始めるかのように唇に力を入れている。そして、10行目で「今ここでおうたがな:」と言い、「ここ」の産出とともに、右手の人差し指で下向を激しく指す。9～10行目を全体として見ると、「さっきも話し掛けてきたのに、まったく気付かない」という喜六の理不尽な行動を問題化する行為となっている。また、発話産出の特徴を見ると、速度は早く、言い回しも粗野で、上の断片で何度か確認してきた「ツッコミ」の産出に類似している。このように、1～10行目が「ボケ+ツッコミ」として観察可能なように組み立てられており、笑う位置が可視化されているといえる。

上述したように、「(落語家による)ボケ+ツッコミ」→「(観客による)大きな笑い」というのが隣接ペアのようなものになっている。一方で「ボケ+ツッコミ」が産出されれば、他方で「大きな笑い」をできるだけ早い段階(=笑う位置)で提出することへの参加者の志向性を、上の分析により示してきた(Schegloff, 1968, 2007など参照)。そして、先の断片3(5行目)や断片4(13行目)などを見ると、「ツッコミ」に重ねながら観客が笑っていることから、笑いが提出可能な「できるだけ早い段階」というのが「ツッコミ」が終わる前(すなわち、「ツッコミ」であることが認識可能になる時点)であるということが分かる。ところが、上の断片では、10行目の産出の終わりまで観客からの笑いは提出されない³。やっと提出されるのは、16行目であり、いざ提出されると、断片3や4と同様に、17～19行目で参加者たちが連鎖を終了させ、次の連鎖への進む。そこで、16行目の笑いの提出がどのように組織化されているかを明らかにすべく、10～16行目のやり取りの詳細を見てみよう。

10行目の終わりまで笑いが来ないと(次図5A)、落語家は、11行目における、喜六としての発話を、10行目の発話に密着させ、10行目で観察される産出特徴に類似した産出の仕方⁴で発話を続けることで笑う位置を延長する。また、11行目の発話の途中でも観客からの笑いがないと、ターン構成単位(TCU)後に「.hhhh」と吸気音を付加し、笑う位置をさらに引き延ばす。ところが、ここでは同時多発的な大きな笑いが起こることなく、観客は笑顔や静かな笑いで落語家を見つめている(次図5B)。落語家は、13行目では観客の方に向き、膝に少し立ち上がりながら「あ:か:んわこれ」を10行目や11行目と同様の産出特徴で産出し、笑う位置をさらに延長し続ける(次図5C)。すると、15行目の初めで一部の観客が笑い始めるが、未だに笑顔や静かな笑いしか提出しない観客も数人いる(次図5D1)。

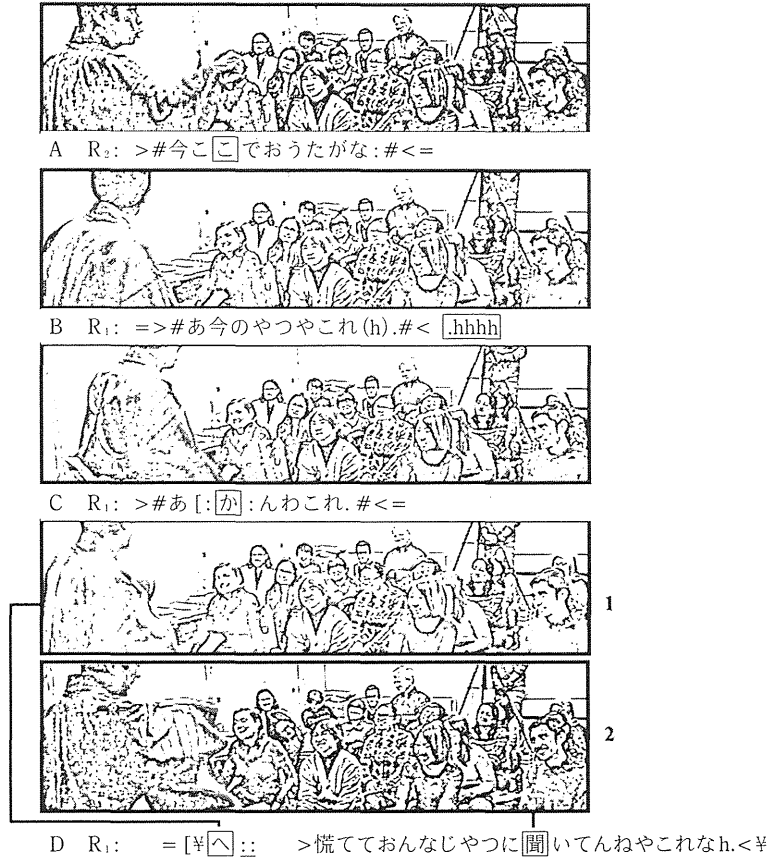


図5 断片6、10～16行目

そこで、喜六が、走って逃げているかのように腕と体を激しく上下させながら、「さっきと同じ人に聞いてしまった」と、自分の「とぼけた」行動を説明するや否や、16行目で観客から同時多発的な大きな笑いがやっと巻き起こる（上図5D2）。

上述のように、参加者は「(落語家による)ボケ+ツッコミ」→「(観客による)大きな笑い」という隣接ペアに志向し、それぞれの行為を組織化する。しかし、以上の断片5、6で示唆されるように、「ボケ+ツッコミ」後に観客による大きな笑いが起こらない場合、落語家が「ツッコミ」をやり直すことで笑う位置を引き延ばしたり、説明を付加したりすることで、笑いを追求することができるようである。

しかし落語の場合、落語家が代々伝わる噺のスク립トをそのまま再生することも多いと思われる。もし断片5の8行目や断片6の13～15行目などが、この落語家が「子ほめ」という古典落語を演じる際に決まって言うセリフであれば、それだけで笑いを追求するという行為をなさない可能性もある。そこで、次の2つの点を考慮されたい。まず、たとえセリフそのものが固定のものであるとしても、そのセリフを再生する時の声の出し方やペー

ス(いわゆる「間」)への変化、顔の表情、身体的表現、などを用いることによって、観客にそのセリフに含まれている「中身」より以上に相互的に働きかけることが可能なはずである。現に、例えば断片6の11~15行目を見ると、観客が少しずつ笑い始めるのを見ながら落語家も笑顔や笑いを自分の現在なしつつある行為に付加して行くように見える。そして、2つ目の点であるが、この落語家にインタビュー(会話分析とインタビューなどのようなエスノグラフィ的な手法の両立性に関して、Maynard, 2003参照)をした結果、落語を演じる時は、ただ単にセリフを再生するのではなく、観客の反応を見ながら即興に噺を調節することもあるということが分かった。特に断片6の13~15行目に関しては、本研究のデータに取りあげられている落語会で初めて言ったセリフではないそうなのであるが、以前の落語会で観客の笑いが少なかった時に即興に言ってみたセリフであり、そのセリフが観客から大きな笑いを得るために有効なものだと分かったため、それ以来「子ほめ」を演じる際に度々使うようになったとのことである。このような現象に共通点があると思われるのは、Jefferson (1984) で取りあげられている困難話 (troubles telling) における笑い話の特徴である。Jeffersonによると、困難な経験を語る際、語り手が以前に別の相手と話していた時に語った経験のある笑える話を再利用することにより、重苦しい困難話における「憩いの場」(time-out) を設けることが可能であり、このようなことが可能になるのは、まさにその話を以前に別の相手に話したところ、それが他人の笑いを呼び出し得るコミックリリーフとして使えるものだと分かったからである(1984: 354-355参照)。このようなことを踏まえて考えると、笑う位置の可視化、および観客による笑いの産出とそのタイミングというのが、落語の噺を修正・変更・洗練して行く過程と密接な関係にあることが分かる。つまり、落語会における観客による笑いの組織化と落語の噺を演じるということが不可分の関係にあるようである。

5. 「理解した」という認識的態度 (epistemic stance) を主張する

Sacks (1989) が、冗談の受け手が笑うことによって、それが理解できたと主張することができる」と述べている。しかし、冗談の内容自体が理解できなくても、その組織化された構造を参照することによって笑う位置で笑うということが可能(1989: 345)である。よって、理解したということを主張する場合には、冗談の受け手は、早めにかつ最初に笑い始めなければならない(1989: 350)。「早めに」という条件を満たすことによって、自分が笑っているというのは、「笑う位置」が検出できたからではなく、冗談の内容そのものが理解できたと主張が可能になる。そして、「最初に」笑うことで、自分の笑いは他の参加者の笑いに誘われたものではないことをも主張できる。

本研究のデータでも、参加者が、笑う位置の出現前に笑う場合がある。例えば、以下の断片7では、落語家が「ツッコミ」を産出する前に、「ボケ」をまだ産出している段階で

Cが笑い始めている。

7 けちん坊（断片2の完全版）

1. R₁: そやけどあんた, .hhな::だと (0.2) た::だやったら .h
2. ひらがなで書いたらちょっとの違いやで .h 1杯ぐらい
3. おご[りいな:. .hh けちんぼ.
4. →C: [heh heh heh [°heh heh°
5. G: [°heh heh heh°
6. R₂: =n >#誰がけ[ちんぼや.#<
7. Ps: [HAH HAH HAH HEH HEH heh heh heh heh

喜六がお酒をただでもらおうとしているという理不尽さが可視化されるのは、3行目で「おごりいな:」の「おご」までが産出された時点である。つまり、その段階に達すると、喜六は、お酒を強引に奢ってもらうとしていることが理解可能になる。そして、「おご」まで産出するや否や（3行目）、Cが笑い始める（4行目）⁴。このように、リアルタイムに産出されつつある落語家のトークを参照し、Cが笑える要素を発見し、それが笑える要素として評価可能なものであることが理解できたということ、早い段階で、最初に笑うことによって公然化している（図6）。



図6 R:おごりいな:.

一つ注目に値するのは、Cの4行目における笑いが静かにかつ控えめに産出されているということである。笑うという行為を産出することによってできることの一つとしては、前話者の発話を評価することである (Sacks, 1989)。Goodwin & Goodwin (1987) は、評価自体が展開中の活動の焦点ではない時（例えば、出来事を語る時など）にもかかわらず話の中に評価対象となり得る要素が含まれる場合に、受け手がどのような評価行為を行なうかについて、分析した。そして、現行活動を中断し本格的な評価活動を開始せずに、現行活動をそのまま続けるということが投射される場合、評価行為を産出する受け手はそれを現話者の発話と重ねながら産出するが、現話者の発話と対抗するものではないことが観察

可能なように、低い音量や控えめな動きで産出することがあると報告している (1987: 36)。

上述のように、参加者たちが「ボケ」と「ツッコミ」という二つを一連の行為として志向する。ただし、断片6では、落語家の3行目を「ボケ」として捉えることが可能であるものの、「ツッコミ」として捉え得る要素はまだ認められない。そして「ボケ」と「ツッコミ」が対となって出現するものであるなら、Cは3行目の喜六の「ボケ」に対して、次に「ツッコミ」が産出されてしかるべきであることが理解可能である。3行目にその軌道が見えてくる喜六の「ボケ」を笑えるものとして理解できたと、笑うことによって評価しながら、これからも産出し続けられると投射される落語家のトークを、笑いを静かにかつ控えめに産出することによって阻止しないようにする。

もう一つの例を確認しておこう。断片8は断片7より若干複雑であり、最初の「ツッコミ」の前の「ボケ」の途中と、大きな同時多発的な笑いを追求する2回目の「ツッコミ」の前置きの説明の途中に、何人かの? 観客が早めにかつ最初に笑っている例である。

8 五つ六つにしか見えへん A12:56 A3 13:01 V29:22

1. R₁: .hh ほなとおぐらいやったらとお:;? .heh とはおわこう見える,
2. .hどう見ても いつつ むつつ と[こないなりまんの?
3. →F: [eh eh heh [heh
4. E: [heh heh
5. G: [heh heh
6. R₂: #あほ↑↑かい(h)なお[え:.#
7. Ps: [hah hah heh [heh
8. R₂: [大体お前
9. 10歳ぐらいの子供をほめてやで: .h↑おっちゃん嬉しい
10. こと言うてくれるなh<. お酒おごりま[ひょうか↓って
11. →C: [eh eh heh heh
12. R₂: #おごって[くれるかお前:.#
13. Ps: [HAH HAH [HAH HAH heh heh [heh
14. R₁: [いや. [子供はおごって
15. くれまへんけどね:, 横手についでる親が喜んで飲ましてくれますやろ?

1～2行目では、喜六が「実際の年齢より若く見える」という甚兵衛に教わった人を褒めるときの原理を子供を褒める場合に当てはめるべく、10才のこどもが5～6才に見えると言えはいかを確認している。落語家が「いつつ むつつ」を発する直後に、3行目でFが独りで体を揺らしながら笑う。そうすることによって、「いつつ むつつ」という発話に何らか笑える要素が認められたということを主張する。Fのこのような位置に産出され

ている笑いに関して、いくつか注目すべき点がある。まず、Fのこの笑いが、喜六のこの「とぼけた」言動に対する甚兵衛による「ツッコミ」が提出される前に、産出されているという点である。換言すれば、笑う位置が実際に提供されるより早い段階で、Fは笑っている。そして、Fの笑いの産出特徴を見ると、断片7の4行目の笑いに類似しており、静かで控えめな笑いである。このように控えめに笑うことによって、F本人も自分が今笑う位置ではない段階で笑っているということへの志向を示しているようにみえる。また、断片7同様、笑いが産出される4、5行目でEとGも笑い始めるが、Fの笑いが明らかにそれより早い段階に来ている。したがって、Fがこのように「早めにかつ最初に笑う」という行為を組み立て、落語家の1～2行目に笑える要素を発見・理解できたという主張を達成している。

一方、6行目で甚兵衛が喜六の「ボケ」に対する「ツッコミ」を提出しても、一部の観客から小さな笑いしか出現しない（7行目）。そこで、落語家は前節で確認したような手続きで、笑いを追求する。まずは甚兵衛として喜六の「ボケ」を説明する（8～10行目）。そして、「ツッコミ」をやり直す（12行目）。すると、観客から同時多発的な笑いが提出される（13行目）。しかし、11行目では、Cが独りで笑い始める。この笑いは10行目の「お酒をおごりまひょうか」が理解可能になった直後に産出されている。こうすることによって、Cは、「お酒をおごりまひょうか」という落語家の発話に何らか笑える要素が発見・理解できたことを主張する。



図7 いくつかむつと□ないなりまんの?



図8 お酒をおごりまひょうか

「ボケ」と「ツッコミ」から成り立つ落語という活動では、笑う位置が構造的に可視化される。よって、内容が理解できなくても観察可能な笑う位置で笑いを提出することができるため、単に適切な位置で笑うというだけでは「理解できた」ことの実証は難しいと考えられる (Sacks, 1989)。しかし、断片7、8で見てきたように、「ツッコミ」が提出される前の早めの段階で最初に笑うことによって、落語の受け手である参加者が噺の内容自体に対する理解を主張することができる。

6. まとめ

本論文では、留学生に対する落語会における観客による笑いの組織化を、記述してきた。分析の結果、特に本研究のデータの場合、「ボケ+ツッコミ」という探索の枠組みが観客にあらかじめ与えられる。そして、それをを用いて落語家の発話を参照することにより、「笑う位置」の検出が可能である。もし笑う位置に適切な笑いが提出されれば、参加者たちが現行の行為連鎖を直ちに終了できる。しかし、「ボケ+ツッコミ」によって可視化される笑う位置において、適切な笑いが提出されない場合、落語家は、さらに説明を施したり、「ツッコミ」をやり直したりすることによって、笑いを追求し、連鎖を拡張することができる。また、観客による適切な笑いが来ない場合に、落語家が説明を付加することもある。そのときは、その説明の付加という行為により、適切な笑いの欠如を「理解の問題」として扱っていることが分かる。しかし、笑う位置が現れる時に笑うという行為を産出することのみで、「理解できた」と実証することは難しい。なぜなら、笑う位置が構造的に備えられ、可視化されるため、噺の内容を理解しなくてもそこに笑いを提出することが可能であるからである⁵。本研究のデータには、噺の受け手が、落語家が「ツッコミ」を提出する前に、「ボケ」の産出の途中段階で、笑いだす例が、いくつも存在している。そのときには、むしろ、笑える要素自体を発見し理解できたことが（単に主張だけではなく）実証されるとも言えよう。このことは、Sacks (1989) のアメリカ英語による冗談に関する研究と共鳴しており、早めにかつ最初に笑うということが、理解を実証するための文化や言語などに依存しない一般的な手続きの一つであるということを示唆する。

一方、本研究では一回の落語会しか見ていない。扱ったデータでは、「ボケ+ツッコミ」という構造が前置きで示されたために、笑う位置が構造的に可視化されやすくなっていた面もあると考えられる。したがって、データを増やして、「ボケ+ツッコミ」以外にどのような構造が認められるかを検討し、それぞれの構造の中で笑うという行為がどのように組織化されるかを見なければならぬ。また、笑うこと以外に、理解がどのように実証されるかを検討していく必要がある。

謝辞

まず、落語家を始めとするデータ収集に協力して下さった方々に深い感謝の意を表したいと思います。また、RASILE (Rakugo, Social Interaction, and Language Education) 研究グループの酒井たかこ先生の協力なしには、本研究は実現できませんでした。心より感謝致します。そして本稿の準備に当たって、西阪仰先生と初鹿野阿れ先生、関崎博紀先生にはドラフトを読んでいただいたり、多くの貴重なコメントやアドバイスを提供していただいたりしました。深く感謝致します。なお、誤解釈、誤植、その他の誤りがあれば、その一切の責任を著者が負います。

注

1. ここで見られる「あー馬鹿」という自己修復は、断片1の直後に「阿呆なことを言うというのがボケ」というふうに説明していることを踏まえると、「阿呆」を「馬鹿」に置き換えるものと思われる。
2. ここでの落語家の身体動作と発話の早さは、4行目の「n誰がけちんぼや」の「n誰が」の部分を、向きを変えながら発話している(図3D参照)ということによっても、浮き彫りにされている。
3. ここで笑いが提出されない可能な理由には、「おうたがな」という関西弁による落語家の発話が理解しにくかったという可能性があると考えられる。
4. Cの笑いに続いて、Gも笑い始める(5行目)が、Sacks(1989)が論じているように、冗談の内容に対する理解を主張するには、早めにかつ最初に笑い始めなければならない。決定的なことは言えないが、Gが笑い始めたのがCの笑いに何らかの形で反応しているからであるという可能性が払拭できないので、ここでは最初に笑い始める参加者のみに焦点を当てる。
5. 無論、理解していても笑わない場合もあると思われる。が、ここで問題にしたいのは心理的状況(つまり、実際に「理解できた」か、あるいは「理解できなかった」か)というのではなく、むしろ公然化された行為によって主張され、示されるスタンスや志向性のことである。つまり、ある参加者の脳裏に特定の理解・知識があっても、それが公然化されない限り、社会的かつ相互行為的な意味合いについては分析者には確実な方法で確認できない。そして、当事者たちもそうである。このため、会話分析では、参加者の内心について敢えて予測せずに、経験的な方法で分析可能な公然化された振る舞いのみに目を向ける。

付録：トランスクリプト記号の凡例 (Jefferson, 2004参照)

>ことば<	周囲の発話より速いペース
#ことば#	荒い調子
こと [ば	重なりの開始時点はブラケットで示す
[ことば	
=ことば	先行発話に密着している
(3.3)	沈黙の長さ (1/10秒単位で測る)
(.)	1/10秒以下の沈黙
こと ::: ば	母音・子音などが伸びる
°ことば°	周囲の発話より小さなボリューム
こと <u>ば</u>	下線部が強調して発音される
こと ば	太文字は大きい音量を表す

.h	吸気音 (息が吸い込まれる音)
heh hah	笑い (音量の大きさは大文字・小文字で区別)
↑ことば	記号後の基本音調が全体的に上がる
↓word	記号後の基本音調が全体滝に下がる
→	行の前に位置する矢印はその行に注目すべき現象があることを表す
wo::rd	イントネーションが上がる
wo:rd	イントネーションがさがる
.	下降イントネーション (発話を終る調子)
,	平板・微上昇イントネーション (発話を続けるような調子)
?	上昇イントネーション (疑問調)

参考文献

- Furukawa, T. (2011). *Humor-ing the local: Multivocal performance in stand-up comedy in Hawai'i* (Doctoral dissertation). University of Hawai'i at Manoa.
- Gardner, R., & Wagner, J. (Eds.). (2004). *Second Language Conversations*. London: Continuum.
- Goodwin, C., & Goodwin, M. H. (1987). Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPrA Papers in Pragmatics*, 1(1), 1-54.
- Heritage, J. (1984). *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Hosoda, Y., & Aline, D. (2011). Positions and Actions of Classroom-Specific Applause. *Pragmatics*, 20(2), 133-148.
- Hutchby, I., & Wooffitt, R. (2008). *Conversation Analysis* (2nd ed.). Cambridge, UK: Polity.
- Jefferson, G. (1979). A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, New York, NY: Irvington Publishers, 79-96.
- _____. (1984). On the organization of laughter in talk about troubles. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 346-369.
- _____. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In G. H. Lerner (Ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, 13-31.
- Jefferson, G., Sacks, H., & Schegloff, E. A. (1977). Preliminary notes on the sequential organization of laughter. *Pragmatics Microfiche*, 1(Fiche 8), A2-D9.
- _____. (1987). Notes on laughter in the pursuit of intimacy. In G. Button & J. R. E. Lee (Eds.), *Talk and social Organisation* (pp.152-205). Clevedon: Multilingual Matters.

- Krashen, S. D. (1981). *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. New York : Oxford University Press.
- _____. (1985). *The Input Hypothesis : Issues and Implications*. London : Longman.
- Maynard, D. (2003). *Bad News, Good News : Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings*. Chicago : University of Chicago Press.
- Nguyen, H. t., & Kasper, G. (Eds.). (2009). *Talk-in-interaction : Multilingual perspectives*. Honolulu, HI : National Foreign Language Resource Center.
- Norrick, N. (2003). Issues in conversational joking. *Journal of Pragmatics*, 35(9), 1333-1359.
- _____. (2010). Laughter before the punch line during the performance of narrative jokes in conversation. *Text*, 30(1), 75-95.
- Sacks, H. (1989). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In R. Bauman & J. F. Sherzer (Eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking* (2nd edition.), Cambridge : Cambridge University Press, 337-353.
- _____. (1992). *Lectures on Conversation* (Vols. 1-2). Oxford : Blackwell.
- Schegloff, E. A. (1968). Sequencing in conversational openings. *American Anthropologist*, 70(6), 1075-1095.
- _____. (2007). *Sequence Organization in Interaction : Volume 1 : A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Schmidt, R. (1990). The Role of Consciousness in Second Language Learning¹. *Applied Linguistics*, 11(2), 129-158.
- Tsutsumi, H. (2011). Conversation analysis of boke-tsukkomi exchange in Japanese comedy. In *New Voices* (Vol. 5), Sydney : The Japan Foundation, 147-173
- Wells, P., & Bull, P. (2007). From politics to comedy. *Journal of Language and Social Psychology*, 26(4), 321-342.
- Wooffitt, R. (2005). *Conversation Analysis and Discourse Analysis : A Comparative and Critical Introduction*. Thousand Oaks, CA : Sage.
- 岡本雅史 (2009) 「実践：漫才対話のマルチモーダル分析」 坊農真弓、高梨克也共編『多人数インタラクションの分析手法』東京：オーム社：187-202
- 酒井たか子 (2012) 「落語が分かるということ：日本語教育の視点から」日本語教育学会国際研究大会における口頭発表. 名古屋大学.
- 林家染雀 (2012) 「受ける・受けさせる」日本語教育学会国際研究大会における口頭発表. 名古屋大学.